パラグアイ渡航を通じたグローカル人材育成への試み

-学生たちの活動から考える-

Journeys to Paraguay for Glocal Leader Development:

Analyses of Student Activities

横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院・教授　**藤掛　洋子**

Dr. Professor FUJIKAKE Yoko

(Institute of Urban Innovation, Graduate School of Yokohama National University)

キーワード：パラグアイ、グローカル人材、グローバル化

パラグアイ渡航の背景

筆者は1993年より1995年まで青年海外協力隊（JOCV）の隊員としてパラグアイ共和国（以下、パラグアイ）農村部で農村女性や子どもたちの生活改善のための活動を行う機会を得た。帰国後は研究と実践の往還の必要性を痛感し（藤掛　2009)、農村女性のエンパワーメントや子どもの教育支援を継続するためにNPO法人ミタイ・ミタクニャイ基金（パラグアイの先住民族の言語、グアラニー語でミタイは男児を、ミタクニャイは女児を意味する、以下、ミタイ基金）[1]代表として教育支援を継続してきた。研究と実践を往還する中でパラグアイのアスンシオン国立大学（以下、UNA）との連携も深まり、2012年9月、国立大学法人横浜国立大学（以下、YNU）とUNAは学術交流協定を締結した[2]。

独立行政法人日本学生支援機構（以下、JASSO）には海外留学支援制度があり、YNUは、「共生社会構築のためのグローバル・スタディーズ・プログラム：横浜国大を拠点とするグローカルな政策提言プラットフォームに向けて」のプログラム等に支援を頂いている。本稿で取り上げるパラグアイ渡航はその中の一つの派遣国に該当する。JASSOより助成を受けた学生を含め2013年度は18名、2014年度14名の学生たちがパラグアイに渡航し、以下の活動に取り組んできた。

１）アスンシオン国立大学との学術交流ワークショップの開催、２）都市スラムカテウラ地区の視察、３）農村部における国際協力活動現場の視察ならびにフィールド調査・国際協力の実践、４）日系人移住地の訪問と交流である。また、参加学生はそれぞれの興味関心に合わせ、インフォーマルセクターでの聞き取り調査や農村女性たちへのリプロダクティブ･ヘルス/ライツに関連する聞き取り調

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

査、伝統工芸品の一つであるニャンドティ[3]生産者への聞き取り調査とデータ分析などを実施してきた。

渡航準備

写真 1

筆者は、2012 年 4 月よりパラグアイへの渡航を希望する学生たちを対象に YNU 独自のカリキュラムであるスタジオ教育において、国際協力の理論と実践について指導してきた。理論編としては、開発理論や援助理論、ジェンダーと開発論、教育開発等、実践編としては、パラグアイ他途上国・新興国における都市・農村開発事例の分析、手法編としては、住民参加型調査開発手法や PCM（Project Cycle Management）、KJ 法、GPS（Global Positioning System）等の演習の実施と語学学習である（写真１）。

2012 年 9 月には先に触れたように UNA との学術交流協定を締結し、学生たちのパラグアイ渡航への大きな弾みとなった。調印式当日は緑の多い YNU 内のキャンパスを学生たちがはき清め、Pedro Gónzalez UNA 学長（当時）をはじめ、駐日パラグアイ大使館豊歳直之特命全権大使を迎える準備を行った（写真２）。

写真 2

学生たちはミタイ基金が行っているパラグアイ農村部での学校建設支援への参画を希望していたこともあり、一部の学生たちはミタイ基金学生部としての活動もはじめた。東京で開催されるパラグアイフェスティバル（実行委員会代表　岩谷寛氏）や千葉パラグアイフェスティバル、日比谷で毎年開催されるグローバルフェスティバルへの参加などである。

途上国における学校建設支援の「きらきら」した部分はメディアや SNS（ソーシャルネットワークサービス）などを通じて紹介されることが多いが、これらの活動は、NGO 関係者のみならず歴史に刻まれることのない無名の地域の方々の無数の努力の積み重ねの結晶である。また、外部者である私たちが支援活動をさせて頂く際に最も重要なことが地域住民とのラポール（信頼関係）の形成であり、このラポールは地道な努力の中でしか構築し得ないことをしっかりと理解しておく必要がある。さらに、学校建設は、住民にとっては「大きな」お金が動くため、建設合意に至るまでの過程で地域住民の間に多くのコンフリクトが発生することがある。それらのコンフリクトを調整していく作業がいかに大変であるのかも学生たちには伝えてきた。さらにまた、ハード面の教育支援のみならずソフト面

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

の支援を充実させる必要があることも学生たちには伝えてきた。

パラグアイ渡航

このような事前学習を経た後、1 年目は 2013 年 8 月末より約 1 カ月間、2 年目は 2014 年 8 月末より約 1 カ月間パラグアイ渡航が実現した。

パラグアイでは首都アスンシオンにおいて UNA の協力のもと学術交流ワークショップを開催し、農村開発やスラムにおける開発課題などを筆者含め UNA 教授陣たちによる講演を行うとともに、学生たちによる報告会を開催した。また、パラグアイには国中のゴミが集積されるカテウラという都市スラムがあるが、ファビオ・チャベス（Favio Hernán Chávez Morán）氏や Nihon Gakko 大学関係者の協力を得て現地視察を行った。また、農村部における調査活動ならびに国際協力活動を行った。

写真 3

パラグアイ渡航で学生たちが訪れた農村は、先住民族の居住地も含めると複数あるが、カアグアス県農村部は、筆者が JOCV 時代より活動を継続している地域であり、2013 年 9 月までにミタイ基金としても 3 つの小学校の建設を支援している。その中の一つの村より、学校増築、あるいは学校移転の要望が出されたため、筆者の調査に YNU の学生たちも参加した。村で起きている課題を解決するために、村の住民の協力を得て、参加型のワークショップも開催した（写真３）。また、パラグアイ教育文化省や NGO 関係者への聞き取り調査を行い、小学校の建設が計画された際には 6 年間だった義務教育が、その後 9 年間に改正されたため、一部の学年を収容するスペースが不足したことやパラグアイ政府の教育政策の転換なども含め、村の学校運営には複数の異なる水準の課題があることが明らかになった。これらの一連の調査を通じ、意見の違う地域住民の合意形成の支援をすることは短期間のパラグアイ滞在では容易ではないことを参加学生たちは身を以って知ることとなった。同時に学生たちはできることを自分たちなりに考え実行に移していった。NGO 学生部として農村地域に入り、若者たちとスポーツを通じた交流をしたり、栄養教室を開催したり、子どもたちを対象にちぎり絵教室を行うなど、短期間でも出来うる様々な国際交

写真 4

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

流活動を行った（写真４）。米国では、2004 年から 2010 年までの間に 80 万～110 万人が海外ボランティアに出ており、70%～80%は 8 週間以内の短期間である（Lough 2014）という。短期ボランティアは、語学力や専門知識の低さにより、相手国・相手側に対する技術移転が不十分であるものの、異文化間交流では成果を上げていると Lough は指摘する。YNU の学生たちも異文化交流と現場における小さな国際協力においては多少なりとも成果を上げていると言えるかもしれない。

パラグアイ渡航後の活動

パラグアイ渡航に参加した学生たちは帰国後も様々な活動を展開している。カテウラのゴミ山に集積される油缶などをリサイクルし楽器を作り、演奏するオーケストラ（Orchestra of Recycled Instrument of Cateura, Paraguay）：カテウラ楽団は今、世界中で注目されている。株式会社良品計画や駐日パラグアイ大使館の支援を得てこの楽団は 2013 年 12 月に来日している。その際、楽団員を横浜国立大学に招き、学生たちが主体となって「音と通じたワークショップ」を開催することができた [4]。パラグアイに渡航したメンバーたちは招聘という活動を通し、国際交流を継続しているのである（写真５）。

写真 5

2015 年 1 月に開催された中南米シンポジウム(横浜国立大学国際戦略推進機構主催、於：JICA 横浜)において学生たちは、ブラジルやパラグアイ、コロンビア、メキシコ等の研究者や一般参加者たちとともに、教育・環境・若者の労働・リーダーシップ･国際交流をテーマに議論を行った(写真６、https://www.youtube.com/watch?v=YbufACk2nkU)。パラグアイ渡航に参加した学生たちは、ここでも自分たちなりの経験を元に未来を創造するために意見をぶつけることが不十分ながらもできたようである。

写真 6

写真 7

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

2015 年 3 月には神奈川県あーすぷらざと横浜国立大学共催による「青年海外協力隊 50 周年記念プレイベント」を他大学の学生たちと共に企画し、「ここから始まる国際協力：横国大生によるパラグアイ渡航報告」(https://www.youtube.com/watch?v=-GG9e5U7LCY) を行うことができた（写真７）。グローバル化し格差が拡大する社会の中で、課題を解決することは容易ではないものの、できることを学生たちは考え続けながら実践している。そのことがまさに必要なのではないかと考える。

日本から一番遠い国の一つであるパラグアイへの渡航を選び、国際協力の現場に入り、失敗し、悩み、力不足を認識しながらも、当該地域の人々の目線に立って社会を創造することの難しさや楽しさを知った学生たちは、帰国後も継続してこのような形でパラグアイ渡航の経験を再考する機会を得ていることに感謝しなければならない。

グローカルに生きる

パラグアイ渡航は、多くの関係者の尽力とともに現地にネットワークを有する地域研究者や実践家、学生たちを受け入れて下さった現地の関係者の方々、そして行きたいと考え渡航のための努力を惜しまなかった学生たちのどれ一つ欠けても成立し得ない。また、現地で長年活動する組織の支援があるからこそ、学生たちは安全に地域に入り込むことができる。

日本政府は、2017 年までに 411 万人程度の「グローバル人材」が必要であると推計し、これに呼応する形で文部科学省は 2012 年に「大学改革実行プラン」を示し、グローバル人材育成推進事業を本格化させている（本名 2013)。しかし、グローバル人材となり得る人物は、グローバルに社会を分析しながらも、地域に生きる人々が置かれている立場に目配りできるグローカルな視点を忘れてはならない。グローカルな力を身に付けることは決して容易なことではない。学生たちは大学などが行うプログラムに積極的に参加し、現場に入り、活動し、失敗から学び取ることが不可欠であると考える。

グローバル化する社会の中で大学が担う役割とは何か

企業のグローバル化や多国籍化は今後益々進むであろう。このような社会の中で村上（2015）は興味深い指摘をしている。国際労働移動という観点からみると知識移転を介してイノベーションにつながっているものの、海外派遣者は必ずしも自発的な移動をしているわけではない。本人の希望に沿わない海外転勤もあり、海外派遣が日本社会のキャリアパスの中に明確に位置づけられていない点や帰国後に海外派遣者の知識や経験が活用されないケースもある（村上　2015）という 。

グローバル化と日本政府が謳うグローバル人材育成、そして日本人の国際労働移転の現実にはややズレがあるようである。

YNU のこのプログラムは、先進国政府や先進国の価値観のみならず途上国・新興国の人々の意見に真摯に耳を傾け、あるいは国内においても当事者の意見を聞くことから「現場を見る・知る」ことが

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

可能となるプログラムである。当該地域で生きる人々の価値観や認識・文化の差異を知り、相互理解を深めることのみでしか、グローバル化した社会の中でローカルな文脈に配慮しつつ共生を目指すための複眼的な視野は醸成され得ないと考える。

このようなプログラムをより幅広く展開するためには、1)安全に途上国や新興国に渡航すること、２）渡航先は比較的治安の安定した国であること、３）相手国の人々の生活に入り込めること、４）３）のためには引率者が当該地域の研究者であり、実践経験があること、５）引率者による当該地域における社会関係資本の蓄積された地域であること、などが必要である。大学側はこのような人材の価値を見出し、育成し、学生や社会に還流させていく制度を構築する必要があるだろう。

同時に、グローバル人材育成という流行りの言葉に翻弄されず、自分の足元をみつめ、ひたむきに努力することを「学ぶ」側も忘れてはならない。グローバル化という大きな社会のうねりの中で学生たちが道を見失わないように見守り、叱咤激励することは容易いことではない。しかし、「大人」も学びを共有し、共に成長する気持ちを持ち続けることが今の日本社会には必要なことではないだろうか。

筆者はパラグアイの村の人々の日常実践より、利害を越えた人間関係のあり方を常に教えられてきた。そのことを忘れずに今後も教育研究に励みたいと考える。

謝辞

学生たちの活動を見守り、応援し、時には叱咤激励して下さっているパラグアイの方々、日系パラグアイ人の方々、日本の皆様、そして世界中で活動される皆様方に心より感謝の意を表します。

主な引用参考文献

Lough, B.J.et.al. （2014） ‘Capacity Building Contributions of Short-Term International Volunteers’ , Journal of Community Practice, Vol.19:2, 120-137.

藤掛洋子（2013）「アクティブ・ラーニングによる『グローバル人材育成』を考える：パラグアイ渡航からの一考察」、『大学マネジメント』 9巻 （頁 22-30）。

藤掛洋子（2009）「研究と実践の往環を超えて-パラグアイにおける開発援助と参加型アクションリサーチから-」,箕浦康子編 『フィールドワークの技法と実際 II-分析・解釈編』、ミネルヴァ書房 （頁 240-258）。

本名信行（2013）「グローバル人材育成：言語とコミュニケーション」、『情報・知識 imidas』、集英社（デジタル版）。

村上由紀子（2015）『人材の国際移動とイノベーション』、NTT出版。

[1] 1995年の設立、2014年11月にNPO法人化した。
[2] 2014年9月には同大学と学生交流協定を締結、2015年3月には横浜国立大学都市イノベーション研究院と同大学農学部ならびに社会学専攻とのダブルディグリープログラムの締結を行った。
[3] グアラニー語で“蜘蛛の巣”、手編みレース。
[4] 本プロジェクトはYNU准教授中川克志研究室とミタイ基金、パラグアイ渡航関係者たちとのコラボレーションである。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.